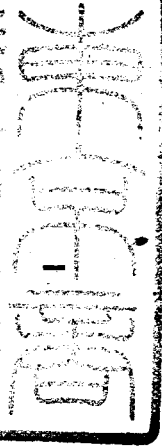


# 現代社會における出生減退の原因について

美濃口時次郎



現代の社會および經濟の正常な發展を經過してきた多くの國における人口の發展のあとをみると、その發展の初期の段階においては、いずれの國においても、いわゆる多産多死で、總人口に對するその年の出生數の割合、すなわち、『粗出生率』と、總人口に對するその年の死亡數の割合、すなわち、『粗死亡率』とが、ともにいちじるしく高かいたことになつてゐるが、しかるにそれらにおいては、おなじやうに、『粗出生率』と『粗死亡率』とが、ともに長期的、趨勢的に逐年低下の過程をすすむようになつてゐる。そしてこのやうな傾向、近代の社會、經濟の發展において、早く前進した諸國の場合にくら

べて、多少の時間的な後くれはあるにしても、わが國においても、すでに第一次大戰以降において、顯著にみられるやうになつてゐるのであるが、このやうに、近代の社會および經濟が、或る一定の發達段階に到達したとき、粗出生率と粗死亡率とが、とくに前者が、長期的、趨勢的に低下の傾向をしめすようになるのは、何故であるか。

現代の社會および經濟が或る一定の發展段階に到達した場合に、何故に粗出生率がこのやうに長期的、趨勢的に

現代社會における出生減退の原因について

低下することになるかということを説明した一群の學説は、出生率の低下をもつて、人間の生物學的な意味における生殖力そのものの減退にもとずくとするもので、私がとくに『生物學的人口學説』と名づけているものである。

もつともおなじく出生率の低下が、人間の生物學的な意味における生殖力そのものの減退にもとずくとはいつても、その生殖力が何故に減退するかということになると、ひとびとの見解は、かならずしもおなじでない。

ひとつの見解は、貧困多産説とでも稱すべきもので、ダブルデーによると、『營養の過多』ということが、またサドラーによると、『安樂と贅澤』ということが、人間の生殖力そのものを弱めるということであるが、しかしこの場合には、何故に、『營養の過多』または『安樂と贅澤』とが、そのように人間の生殖力を弱めることになるかということがあきらかでない。

出生率の低下が人間の生殖力そのものの減退にもとずくとする他のひとつの説は、H・C・ケーリーおよびハーバート・スペンサーによつて説かれたもので、この場合には、人間の生殖力を減退させるものは、『營養の過多』または『安樂と贅澤』ではなくて、『精神生活の増大』であるということになつている。

たとえばケーリーは、あらゆる生物を通じて、生殖力と發展とが反比例するという法則が、妥當するということ、そして人間が如何なる他の動物よりも、緩慢に増殖するということは、この法則の作用の結果であるし、またこの法則が作用する結果として、人間の生殖力は、人間特有の諸機能力がより、一層活動的になり、人間がより、一層發達するにつれて、次第に減退すべきであるということを主張している。

かれの説明によると、人間の身體は、多様な任務と能力とをもつた多くの部分から成つてゐるが、それらの諸部分

の總體に對しては、生命力のひとつの限界があるので、したがつてそれらの諸部分のそれぞれの能率は、それらの諸部分のあいだに、この確定的な生命力が、どのように分配されるかということによつて、決定されることになるが、しかるに、吾々の社會においては、改善は、知的な活動の領域を擴大して、そして神經系統を刺戟する方向にある。そして人間を扶養するために必要な貨物を生産、變形する勞働のなかに、精神が肉體と混合することが、より一層多くなつていたので、このような混合の結果として、生殖力が減退するとともに、人間の生命維持力が増大することになるということである。

この場合には、生殖力の強よさと神經系統の發展とは、つねに逆比例的な關係に立つことになる。したがつて精神活動の増大にともなつて、生殖力がそれに逆比例して減退することになるわけである。

またこれとほぼおなじ見解は、スペンサーの場合にも、あきらかにみとめられる。もつともかれの場合には、生物一般の場合における種を保存する力は、その種の各個體を維持する能力、すなわちかれが『個體化』と稱するものと、新しい個體を生み出す能力、すなわちかれが『生殖』と名づけているものとの、二つのものであるが、それらの二つの力は、かれの場合においても、ケリーの場合とおなじく、ひとつの共通な力のストックから得られるので、したがつて、相互的に變化することになると考えられているのであつて、この場合には、生殖力は、個體化の進行するのにつれて、減退することになるわけで、かれは、このことが、單に生物一般についてだけでなく、人間の場合についても、おなじく妥當するということを主張している。

しかしケリーおよびスペンサーのこのような理論では、近代的な社會および經濟の發展の初期の段階を通じて、現代社會における出生減退の原因について

いずれの國においても、出生率がいちじるしく長がい期間にわたつて、はなはだ高かつたということを説明することができない。というのは、もしも『個體化』、とくに精神活動の増大が、生殖力そのものを減退させるということが、眞實であるとすれば、精神活動の増大をその特質とする近代的な社會および經濟の發展とともに、たえず生殖力が低下して、したがつて出生率が、それにつれて、たえず低下しなくてはならないことになるわけであるが、しかるに事實をみると、近代的な社會および經濟の發展の初期の段階にある國では、ほとんどいずれの國においても、その出生率がそれ以前の時代にくらべて、いちじるしく高くなつていゝというだけでない、またその高かい出生率が、かなりの長がい期間にわたつて、低下の傾向をしめすにいたつていないからである。

もつともこの點については、スペンサーの學説が、ひとつの説明をもつてゐることを、忘れてはならない。

かれの場合には、個體化するなわち進化は、ひとつの節約を含んでゐるので、進化の各追加部分が、そのために生ずる費用を超えた利益をもたらして、その結果として、『生命資本』のより大なる増加をもたらすことになるが、この増加資本の一部は、個體化するなわち進化のために、他の部分が、生殖するなわち個體の形成に充てられることになるので、したがつて、この場合には、個體化するなわち進化の前進は、生殖力を減退させることにならない。反對に増加させることになる。そしてこのことは、文明の進歩につれて神經の構造と機能とが發達する場合についても、いうことができるが、しかしそれは食料の追加量が一定の追加労働量によつて得られるときのこと、それが比例以上の労働量によらなくてはならないことになる、個體化するなわち精神の構造および機能の發達と生殖力とのあいだの相互關係が、實現されることになるのである。

したがつてこの場合には、生殖力は、文明の初期の段階では高かまるが、食料の追加量が比例以上の労働量によらなくては得られないときになると、低減することになるわけで、近代的な社會および經濟の正當な發展を經過した諸國における出生率の發展が、一應これによつて説明することができるようにもみえるが、しかしそれらの諸國における出生率の低下傾向は、かならずしも食料生産について、收穫遞減の法則の作用が文明の發達による收穫遞増法則の作用を超えて、それ自身を實現したときにはじまつていゝといふことができない。むしろかれのいふ文明の進歩による『生命財産』の増加が、急激におこなわれているときに、はじまつていゝのであつて、この説は、すでにこの點で、近代社會における出生率低下の現象を正しく説明していゝといふことができない。

精神活動の増大ではなくて、『生殖細胞』の衰退によつて、生殖力が低下するといふことを主張する、コラード・デニの説は、この點ではすぐれている。

かれによると、生殖細胞の生命は、體細胞のそれとおなじく、有限なもので、一定の進化の過程を経て、かならず死滅することになるが、ただ環境の分化作用にさらされることが、はるかにより、すくないので、その生命が著るしくより、長がいついふ點で、異なつていゝだけである。したがつてこの場合には、ひとつの人口の生殖力は、その人口の成長とともに、逐次低下することにならなくてはならないわけであるが、しかし事實はそうでない。生殖力は遺傳するものであるが、ひとつの世代のひとたちの大部分は、それを生んだ世代のひとたちのなかの、もつとも多産的なひとたちから生まれるので、その作用を受けて、人口發展の初期の段階では、その生殖力が増大して、生殖細胞の自然的な衰退にもとづく生殖力の減退を過相殺することになるが、しかるにつぎの段階になると、それらの二つの相反す

現代社會における出生減退の原因について

る作用が均衡して、生殖力が停滞し、最後の段階になると、生殖細胞の自然的な衰退による生殖力の減退の方が、優位を占めることになつて、生殖力が低下することになるといふことで、この場合には、生殖力は最初に上昇して、つぎに停滞して、最後に低下することになるわけで、近代的社会および經濟の正常な發展を經過した國の出生率の發展を比較的によく説明しているといふことができる。

しかしこれは、デニの場合だけに限ぎられたことではないが、近代社会における出生率の低下が、このように、生理的な意味における生殖力の減退にもとずいていふことが、はたして妥當であるかといふことは、ひとつの疑問である。

デニは、出生率の低下に、生理的原因のほか、心理的な要因が作用するといふことをみとめている。そして社会の上層階級において、出生率がより、低いのは、親がより、富裕であるほど、子供の數が多いときに、その家族の經濟のおよび社會的な標準を維持して、そして食物そのものよりも棄て去ることを好まない、知的および道德的な満足、いわゆる精神的な要求を確保することが、より、困難になるからであるといふこと、また下層階級において、出生率が低下するのは、上層階級に上ることがより、困難になると、結婚を延期するか、またはそのような上昇を可能にするために、子供の數を制限することがあるといふこと、大衆の社會的な地位を改善しようとする願望が、出生率を低下させるといふことをあげているにもかかわらず、かれはそれらのことが、根本的には、より、一層内面的な生物學的諸要因の共通の表現であるといふことを主張して、そして「出生率がより低いのは、根本的には、新マルサス主義によるわけではない。かれらの産兒調節を主張する理性の説得的な論議をかれらの心に納得させるものは、むしろ生殖本

能の衝動が失なわれてしまったという事實である」といつている。

しかしそれらの出生の制限に導くような社会的、心理的な諸要因が、すべて生物學的な諸要因の共通な表現であるという事は、何等立證されたことではない。それはひとつの憶測にすぎないといわなくてはならない。出生率低下の生理的な要因としては、性病、精神病、アルコール中毒などが考えられる。またデニの指摘しているように、人口の年齢構成が『老齡化』して、人口のなかに占める老年人口の割合が増大したときに、そのことが、その人口の心理のうえに、ひとつの決定的な効果をもつということは正しいが、しかし出生の制限に導くすべての要因が、生殖力または生殖細胞の衰退の結果であると斷定することはできない。

## 二

現代的な社會および經濟の正常な發展を經過してきた諸國において、それが或る一定の發展段階に達したときに、何故に粗出生率が長期的、趨勢的に低下するようになるかということを説明した、他のひとつの見解は、それを出生率そのものを支配する諸要因の作用によるものとはしないで、死亡率の低下、とくに醫學および衛生學の進歩、發達にもとづく死亡率の低下によることを主張するもので、ブドゲの見解は、その代表的なものであるが、この説は、出生と死亡または出生率と死亡率とが、たがいに平行する關係にあるということを主張する、いわゆる『人口動態平行説』のうえに立つていゝことができる。

出生と死亡または出生率と死亡率とのあいだに、たがいに平行する關係があるということは、すでにマルサスが指

現代社會における出生減退の原因について

摘したところで、それはかれの人口理論からの必然的な歸結である。すなわちそれによると、人間はすべての生物の場合とおなじように、『人口の原理』の作用によつて、「それに對して準備されている營養物を超えて増加しようとする恒常な傾向」をもつてゐるが、しかし「人間の生活にとつて食料を必要ならしめる自然の法則のために、人口はけつしてそれを養ふことのできる最低の營養を超えて増加することができない。したがつて一般に出生をすくなくする『豫防的抑制』または死亡を増加して「人間の生命を短かくする」ところの、『積極的抑制』のいずれか、またはそれらの兩者を通じて、生活資料の量に一致させることにならざるを得ないことになるのであつて、この場合には、『それに對して準備されている營養物』または『生活資料』と、人口の生活水準とがあたり合はれてゐるかぎり、出生が増加すれば、死亡が増加し、出生がすくなくれば、死亡がすくなくなるし、また反對に、死亡が多くなれば、出生が多くなり、死亡がすくなくなれば、出生がすくなくなるということになるのであつて、出生と死亡とはたがいに平行することになるわけである。

しかしベルチヨンの場合もそうであるが、ブドゲによると、出生率と死亡率とのあいだには、たとえば出生がすくないと、それだけ乳兒死亡の可能性がすくなくなるというように、出生率の低下が死亡率の低下に作用するという關係もないわけではないが、しかしそれはきわめて小さい。むしろ醫學および衛生學の發達にもとづく死亡率の低下が、出生率低下の原因であるというので、かれは死亡率の低下がつねに出生率の低下を生ずるということを説いて、乳兒死亡率の低下が出生の減退に作用するとともに、その上昇が新らしく子供を生もうとする意思のうえに、促進的な作用をおよぼすということ、高年齢者の死亡率が低下すると、そのような高年齢者を扶養する負擔が増加するために、



結婚年齢が上昇するし、また結婚をしても、より、すくなく子を生もうとすることになると、また死亡率が低下して、生産年齢者が増加することになると、このことは職業戦線における競争の激化として、感ぜられて、將來において子供の成功を困難にするかも知れないという危惧の念をもたせることになるということを主張している。

しかし現代的な社會および經濟の或る一定の發展段階において生ずる出生率の長期的、趨勢的な低下の傾向が、このような『醫學および衛生學の發達』にもとづく死亡性の低下によると見ることが、はたして妥當であるかというところは、疑問である。

というのは、第一に、出生率と死亡率、とくに乳兒死亡率とのあいだに、かなり密接な關係がみとめられるといふことは、たしかな事實が、乳兒死亡率と出生率とのあいだの關係について作成された多くの統計が、このことをあきらかに立證しているし、また近代的な社會および經濟の正常な發展をしてきた諸國における粗出生率および粗死亡率の發展のあとをみても、すくなくともこれまでのところでは、それらのあいだにかなり密接な平行關係が、みとめられるが、しかしそれにもかかわらず、粗出生率と粗死亡率とは、つねに平行するとはかぎつていないと考えられるからである。

粗出生率を規定する要因が、人口のなかの妊孕能力年齢（十五、六歳から五十歳ぐらいまで、とくに二十歳臺および三十歳臺）にある女子の割合と、その妊孕能力年齢にある女子人口の出生率とであるということ、また年齢別の死亡率が、一般に乳兒においてかなり高かいが、それが年齢の上昇とともに急速に低下して、青年期から以降次第に高かまつて、

現代社會における出生減退の原因について

老年人口においてもつとも高くなるということは、とくに指摘するまでもないことであるが、しかるに粗出生率と粗死亡率とが、かなり長い期間にわたつて、ほぼ一定の水準を維持した後、それが平行して長期的、趨勢的に低下するようになると、その人口の年齢構成が、いわゆる『老齡化』の過程をたどつて、年齢のより低い人口ほどその数のより多い、いわゆる『三角形』の構成から、死亡率がなお低くて、そして人口のなかでそのみが妊娠能力をもつた、一般に『生産年齢人口』とよばれる青壯年人口の割合が、妊娠能力のない若年人口および老年人口のいずれのそれよりもより大きい、いわゆる『吊鐘型』の年齢構成になるとともに、さらにそのつぎには、青壯年人口の割合が、若年人口のそれよりも、また一般に死亡性のもつとも高き老年人口の割合が、青壯年人口のそれよりも、より大きい、いわゆる『壺型』の年齢構成に推移するので、したがつてこの場合には、その影響を受けて、粗出生率と粗死亡率とが、平行することにならない。とくに人口の年齢構成が、『吊鐘型』から『壺型』に轉化する場合には、『醫學および衛生學の進歩』によつて、たとえそれまでよりもより一層死亡性が低下したとしても、一般に死亡率のもつとも高き、そして妊娠能力のまつた古い老年人口の割合が、いちじるしく高くなる結果として、粗出生率が停滞から上昇に逆轉するとともに、粗出生率は、その低下の程度をより大にすることになるのであつて、ついに粗死亡率が粗出生率を超えて、人口が減少することになると考えられるが、このような場合には、いふまでもなく、出生率と死亡率とは、たがいに平行するということにならない。反對の動きをすることになるわけである。

もつともブツドゲといえども、出生率と死亡率とが平行しない場合のあることをみとめていないわけではない。これはひとつの國の人口扶養力の發展が、より緩慢になる場合には、ひとたび到達した生活水準がふたたび低下しない

かぎり、すくなくとも労働生産性の増進とひとしい程度において、出生率と死亡率とが平行しないで、人口の自然増加率がそれだけ低下することになるといふことを説いて、そして英國、フランスおよびオーストラリアについて、このことを立證しようとしている。

そして英國については、この國が前世紀の八十年代の中頃までは工業國として無競争の状態にあつたのに對して、それ以降は他の諸工業國と競争しなくてはならないことになつたということ、資本輸出國になつたということ、またフランスについて、この國において工業があまり發展しなかつた結果として、外國食料の輸入によつて人口扶養力を擴大することができないということ、國民の租稅負擔が多いということ、資本の新たな形成が獲得された剩餘所得の再投資によらないで、従來の所得のより、大なる部分の資本化によつてゐるために、個人的な消費を制限するか、産兒をより一層制限して、子供の教育費と養育費とを節約せざるを得ないことになるといふこと、またその資本が國內に投下されないで、海外に投資されてゐるといふこと、土地財産の法的な財産分割制度がおこなわれてゐるといふことを、その理由としてあげてゐるが、このことは、あきらかに、近代的な社會における出生率の傾向的な低下が、單に『醫學および衛生學の進歩』にもとづく死亡率の低下にのみよつたものでないといふことが、かれによつて暗黙のうちに認められてゐるといふことを含意してゐるといふことができる。

すなわちこの場合には、死亡率の低下のほかに、人口扶養力の發展の緩慢になることが、出生率低下の他のひとつの原因であるといふことになるが、しかしかれのあげてゐる他のひとつの、オーストラリアの例によると、それだけでもない。オーストラリアにおいて、出生率の低下が死亡率の低下よりもより、大であるのは、労働者とその労働力の

供給を制限して、生活水準を高めかめるために、意識的に出生の制限をおこなう結果であつて、國民大衆の經濟狀態が勞働の供給と需要とのあいだの關係に依存しているところでは、どこでも見られることであるといふことであるが、もしもそれが眞實であるとすれば、出生率は、この場合には、死亡率の低下でも、人口扶養力發展の緩慢化といふことでもなくて、生活水準を高めようとする意欲のうちにあるといふことになるわけである。

近代的な社會および經濟の正常な發展を經過してきた諸國における出生率の傾向的な低下は、かれ自身の提示している例そのものがしめすように、すくなくとも『醫學および衛生學の進歩』による死亡率の低下といふことだけでは、説明することができない。死亡率の低下が出生率低下のひとつの原因になつてゐるといふことは、事實であるが、しかしそれはあくまでもひとつの原因にすぎないのであつて、近代的な社會における出生率の傾向的な低下は、むしろより大なる程度において、出生率そのものを規定する社會的な諸事情にもとづくといわなくてはならない。

### 三

現代的な社會および經濟の正常な發展を經過した諸國において、それが或る一定の發展段階に達したときに、何故に出生率が長期的、趨勢的に低下することになるかといふことを説明した、さらに他の一群の學説は、それを生理的な意味における生殖力の減退または死亡率の低下ではなくて、主として社會的、心理的な諸要因の作用にもとづくとするものであるが、しかし何が出生率低下の原因であるかといふことになる、その説明の仕方は、かならずしも一致してゐない。

プレタノノによると、出生率が低下することになるのは、厚生すなわち生活程度の向上の結果であるということである。

出生率の低下が、婚姻の減少と、一夫婦あたりの出生数の減退との、二つの原因にもとずいて生ずるということは、とくに指摘するまでもないが、かれによると、生活程度の上昇にともなつて、婚姻率が低下するのは、つぎの五つの理由によるといふことである。

一 將來の職業のための教育と準備とに對する要求が高かまるために、生活の資を得るのに必要な豫備教育のために、より多くの時を必要とすることになるので、無配偶者がより多くなること。

二 社會的な要求が高かまる結果として、一家を維持することが、より困難になること、低く文化段階にあつては、女子と子供とは、収入の源泉となるが、より高い文化段階になると、それは支出の源泉となる。

三 女子の經濟的獨立性の上昇。かれによると、女子を結婚に誘引するものは、性欲の満足ではなくて、愛兒心と生活の支柱を得ることとの二つである。したがつて女子の男子からの經濟的な獨立性が高かまると、女子を結婚に誘引する動機のひとつがなくなることになる。

四 享樂の競合、新しい發明、發見、商取引の増大と、教育の一般的な普及とにつれて、男女の關心範圍と趣味とが擴大して、その欲望が増加するとともに、女子にとつても、男子にとつても、家庭生活の重要性がよりすくなくなる。

五 女子の獨立性と教養および獨立的な判斷の増大、結婚年齢がより高くなるにつれて、男性は結婚についての

現代社會における出生減退の原因について

幻想からより自由になるとともに、女子の獨立性、教養および獨立の判斷は多くの者に結婚をより愉しくない、望ましくないものであるとおもわせるようになるし、また兩性が精神のおよび道德的に高かくなると、双方の満足、足の減少と、より高貴なものに根ざしたより洗練された文化と、生活共同體としての結婚が何を果たすべきかという事について、より高き解釋との結果をして、生涯の友にしようとするひとを見出だすことが、より困難になる。

またかれは、生活程度の上昇にともなつて、出生力すなわち一夫婦あたりの出生數が、減退する理由として、生活程度および文化の發展とともに増加する性病と精神病と、とくに生殖意思の減退ということとをあげて、そしてその生殖意思を減退させるものとして、つぎの二つのものをあげている。

一 享樂の競合、女子の中で、流行を追う婦人および社交の中心にある婦人の場合には、妊娠および産褥中の生活をすることを不愉快さ、この不愉快は、そのために放棄しなくてはならない享樂が、より多様で魅力的であるほど、より一層つよい。他の現代的な婦人の場合には、婦人解放運動のひとつの結果で、この場合には子供部屋の用のためにその目的の追求をできるだけ害されないことを望むことになる。職業に従事している婦人の場合には、母性活動のために、他の享樂を得るための手段の調達が害されるということ、工場の女子労働者の場合には、出産後の就業禁止のために生ずる所得を避けようとする結果である。

また男子の場合に、その生殖意思を制限するものは、婦人の健康に對する顧慮のほかに、主としてその資力が制限されているために、子供を多數生んだ場合に生活上の他の諸要求を如何なる程度まで妨げることになるか

の考慮である。

二 子供に對する愛情の純化、この結果として、多くの病身のひとたちが、自分の病氣を遺傳する可能性のある子供を生むことを逡巡するようになるし、また親はすでに現存する子供によりよい教育をあたえ、より大なる相續分をあたえて、その子供の生存競争のために、よく裝備することに努力するようになる。

またオルデンベルグによると、出生率の低下の『可能的な原因』としては、生理的なものとして、ブレンターノのあげている性病および精神病のほかに、なおアルコール中毒と栄養過多とがあるが、しかし主たる原因は、『自由意思的な』すなわち『意識的な』出生制限であるということで、かれはこの自由意思的な出生制限のおこなわれる原因として、合理的な思考と經濟的な認識、客観化の動因、および都市的集合生活の環境の、三つのものをあげている。

『客観化の動因』というのは、たとえば企業家はその企業を、行政官がその行政對象を、農業者がその家畜を、多少とも盲目的に私利を超えてそれに奉仕する偶像とすることで、かれはフランスの農民が、このために、農場に過重な負擔をかけたり分割したりすることにならないように、計画的に子供の數を制限していることを指摘している。

しかしかれによると、この意識的な出生制限の動因としてとくに重要なものは、『都市的集合生活の環境』と、『現代的な合理主義的な文明』とで、かれはそれらについて、つぎのことをあげている。

- 一 子供の將來労働力の價值、農村では、家族に労働力の附加されることが、高かい經濟價值をもつているが、都市では、若年労働者と妊産婦とに對する労働保護立法のために、いちじるしく價值が低くい。
- 二 都市には遊び場所と空氣とが缺乏しているので、育児がより困難である。

現代社會における出生減退の原因について

三 社會的毛細管現象、ひとが低くい社會的な地位から高かい社會的な地位に昇ろうとする本能的な傾向、すなわち『社會的な認識および競争の本能』をもっているが、このような本能は、強度の社會的な差異があつて、社會的な階段を自由に登ぼることができて、そしてもつとも大きな經濟的の可動性をもっている。密集的な都市生活において、もつともつよくあらわれるもので、この場合には、その結果として、主として中層階級において、産兒制限がおこなわれる。下層階級は下に下がるができないし、上層階級は上にあがるができないからである。

四 現代的な合理主義文明と、それによる宗教的に拘束された生活觀の衰微。

宗教時代には、宗教的な命令が、一部分は習俗を通じて、一部分は個人の直接的な指導を通じて、性衝動を規制するとともに、多子の負擔を顧慮することなく引き受ける決心を培養したが、この原動装置は、啓蒙主義の前進とともに、老朽して役に立たなくなつた。『産兒制限の手段の完成』ということも、『新マルサス主義運動』も、それらはすべて、この合理主義的な認識の所産である。

#### 四

しかしこれらの諸説について問題になることは、現代的な社會および經濟の發展の前期の段階にある諸國において、出生率が長期にわたつて低下しないで、高かい水準を維持しただけでなく、ときによるとそれが却つて高かまつていくことさえあるということを如何に説明するかということである。



というのは、たとえばブレンターノの場合についていえば、生活水準の高まることが、かれのあげている諸事情、すなわち教育費の増大、女子および子供の経済的な価値の轉倒的な變化、女子の獨立性の増大、享樂の競合、愛兒心の純化というようなことを生じて、その結果として、婚姻の減少と産兒の意識的な抑制とがおこなわれるということになつてゐるが、しかるにそのような生活水準の上昇ということは、すでに現代的な社會および經濟の發展の初期の段階から見られたことであるから、したがつてもしもこの説が正しいとすれば、その場合には、出生率は、現代的な社會および經濟の發展とともに、逐次低下しなくてはならないことになるが、出生率は、事實においては、現代的な社會および經濟の前期の段階においては、いずれの國においても、高かい水準を維持するか、ときによると、却つてそれが低下ではなくて、上昇していることさえあるからである。

もつともこの點については、ブレンターノとともに一般に『厚生説』の主張者とみられているモムベルトは、厚生の増進すなわち生活水準の上昇そのものが、直接的に出生減退的な作用をもつものとはかぎらないということをあきらかにみとめて、そしてこのことについて、經濟的に不利なとき、たとえば物價騰貴のときに、經濟的により有利なときにくらべて、結婚がより、すくなくなるが、しかるに新婚者は出生總數の四分の一を占めるから、結婚の増加が出生の増加を、結婚の減少が出生の減少をおこすということは、見易いことで、經濟的に不利なとき、すなわち生活水準が低下することは、この意味において、出生の減退をもたらすことになるし、またその反對の場合には、反對の結果を生ずることになるのであつて、このような作用が多年にわたつて繼續するということも、あり得ることであるといつてゐる。

現代社會における出生減退の原因について

生活水準の上昇は、かれの場合には、それ自身としては、出生の減退をもたらすとはかぎらない。むしろそのことが出生を増加させる作用をすることもあるのであるが、しかしかれによると、生活程度が永続的に高かまる場合にはそれにもなつて、通例は、『合理的な思考と経済的な認識』が増大することになるのであつて、出生の制限がおこなわれるようになるのは、まづたくこの『合理的な思考と経済的な認識』が増大した結果であるということである。したがつてこの場合には、生活水準の上昇ではなくて、『合理的な思考と経済的な認識』との増大ということが、出生制限の原因であるということになるが、しかしこのような『合理的な思考と経済的な認識』の増大ということだけは、生活水準の上昇という場合とおなじで、現代的な社會および經濟の發展の初期の段階において、出生率が高い水準を維持して低下しなかつたというだけでなくて、ときによると、却つてそれが高かまつたのは、何故であるかということが、理解することができないことになる。というのは、そのような思考と認識とは、現代的な社會および經濟の發展の初期の段階においても、たえず増大したであらうと考えられるからで、この點では、生活水準の上昇をもつて、出生制限の原因であるとする場合と、何等異なるところがないわけである。

『合理的な思考と経済的な認識の増大』とは、生活水準の上昇の場合とおなじように、出生減退的に作用をするとはかぎらない。たとえば、現代的な社會および經濟の發展の初期の段階にある國では、一般に『營利』ではなくて、『生計の原理』のうえに立つた、そして家族の努力をもつて構成される、いわゆる『家族經營』が、なおひろくその存在を維持していることが多い。わが國の場合についてみても、昭和二十二年の臨時國勢調査の結果報告によると、就業人口の總數、三千三百三十萬人のなかで、その約三分の二にあたる二千八百八十萬人が、『家族經營』に屬していること

になつてゐるが、それらの『家族経営』では、妻および子供たちの半端な努力が、いわゆる『家族手助け』として、生産的に利用することが、容易すくできるので、したがつてこの場合には、現代的な社會および經濟の發展の初期の段階にある諸國において一般に見るように、それらの子供たちが成人して獨立するときに、仕事口を見出だすことができるかぎりには、結婚をすることも、子供をもつことも、負擔にはならない。むしろ「子は寶」であるから、『合理的な思考と經濟的な認識』との發展が、出生増加的に作用することになる。そして妻および子供の經濟的な價值に顛倒的な變化がおこつて、それが『寶』ではなくて、『負擔』になるときにおいて、そのような思考と認識の發展が、出生減退的に作用することになるのであつて、現代的な社會および經濟の發展の初期の段階において、『合理的な認識と經濟的な思考』の發展があつたにもかかわらず、出生率が高かくて、それが或る發展の段階に達した後において低下してゐるのは、ひとつには、このように妻と子供との經濟的な價值に、ひとつの變化がおこつたということにもとづいてゐることが出来る。

現代的な社會および經濟の正常な發展が、或る一定の段階に達したときに、出生率が何故に長期的、趨勢的に低下することになるかということは、デュモンやオルデンベルグなどの主張する、いわゆる『社會的毛細管現象』によつて、もつともよく説明することが出来る。

もつともデュモンによると、「人間はすべて低い社會的地位から高い社會的地位に昇ろうとする止むことのできない本能的な傾向をもつてゐる」ので、「すべてのひとたちは、その全力をつくして、ひとたび到達した地位を他に奪われないことに努めて、他人を凌ごうとするほかには、何等かえりみるところがない。あたかも油が燈心に

現代社會における出生減退の原因について

沿つて昇ぼるように、かれを魅する理想の光に向かつて、たえず上昇しようと努めるのであつて、光があかあかとしてつよければつよいほど、社會的毛細管現象はますますはげしくおこなわれることになる」ということであるが、しかしこのようなことは、かれが『本能的』という言葉で言いあらわしているように、つねに存在するものではない。

現代的な社會および經濟の發展の初期の段階にある諸國についてみると、そこでは、中世の社會におけるとおなじように、人と人とのあいだの社會的な結合關係が、人間としての、すなわち全人格的のものであつて、後期の段階にある諸國の場合におけるように、獨立的な人格のあいだの機能的な關係になつていない。したがつてここでは、この人間的な、全人格的な結合の原理の典型的な表現である『家族主義の原理』が、ひろく社會を支配することになる結果として、一般に『身分』の觀念と、また『身分相應の生活』の觀念とが、人間の生活活動のすべてを貫らぬいて、おこなわれることになつていたのであつて、このことは、當時の資本主義的な經營における労働者と資本家とのあいだの間柄が、當時の『業主家長説』がしめすように、親子のそれであると考へられていたということ、労働者と資本家とのあいだの間柄をもつともよくしめす賃銀が、労働力の單なる商品としての價格で、したがつてその賃銀を受けるひとの性、年齢などの如何を問はず、單純にその業績に應じて支拂らわれる業績賃銀ではなくて、その賃銀を受けるひとの生活の必要に應じて支拂らわれる生活賃銀が、支配していたということ、したがつてまた賃銀が現金だけで支拂られないで、その一部が、『福利施設』というような形で支拂らわれていたということ、賃銀學説が、カンティヨン、スミス、リカード、マルクスなどのような、現代社會發展の前期の段階に生存した諸學者の場合に、すべて『生活費説』すなわち『勞働力の再生産費説』であつたということによつて、もつともよくしめされているというこ

とができる。

しかるにこのような『身分相應の生活』の觀念が支配するところでは、生活の仕方および水準が、身分によつて規定されているから、ひとは限りなくその欲望を高かめることができない。中世の封建主義の社會では、身分によつて定められた生活を越えた、分不相應の生活することは、法の力によつて禁じられていたし、またそのような法的な制限のなくなつた、現代的な社會および經濟の發展の前期の段階においても、社會の慣習によつて抑制されていた。坑夫は坑夫らしい、職工は職工らしい、教員は教員らしい、生活ができれば、それで満足すべきであるし、また多くのひとたちは、それで満足しているのである。

したがつてこのような、『身分』の思想と、『身分相應の生活』の觀念とが、支配しているところでは、實質所得の増大は、いうまでもなく、その身分相應の生活の水準を或る程度高かめることにはなるが、しかしそれよりも、多く、怠惰を増大するか、または産兒をより多くすることに、作用することになるのであつて、現代的な社會および經濟の發展の前期の段階において、生産性または實質所得のたえざる増加が、出生率の上昇または高出生率の持續を伴なつたのは、その當時のひとたちの多くが、どこの國でも、このような『身分』の觀念、『身分相應の生活』の觀念をもつていたということに、もとづいていたといふことができる。

しかるに現代的な社會および經濟の發展が、その後期の段階に到達するとともに、多くの國では、そのような『身分』の思想と、『自分相應の生活』の觀念とに代わつて、『人格の自由平等の原理』のうゑに立つた、『機能的な社會結合の原理』が、ひろく社會を支配するようになってゐるが、このことは、たとえば労働者の多くの者が、古るい『生活賃

現代社會における出生減退の原因について

銀』の思想を棄てて、『業績賃銀』『公正賃銀』の思想をもつようになったということ、賃銀學說のうえでも、『生活費説』または『勞働力再生産費説』を主張する者が、マルクスの傳統を守るひとたちだけで、ほとんどすべてのひとたちが、『限界生産力説』またはその變形されたものを主張するようになったということからも、あきらかである。

デュモンやオルデンベルグなどの主張する、『社會的毛細管現象』が生ずるようになったのは、このような『身分』の思想と『身分相應の生活』の觀念が失なわれて、それに代わつて、『人格の自由平等の原理』のうえに立つた、『機能的な社會結合の原理』が、支配するようになった結果である。すなわちこの場合には、人格は自由平等であるから、ひとびとはその生活の仕方および高かさについて、何等の拘束を受けることがない。どのような職業のひとでも、最高の生活を望むことができるし、またできることになるのであつて、その結果はひとをより、勤勉にする、すなわち一般に勞働意欲を高かめて、實質所得をより、大にすることになるが、しかるにもかかわらず、欲望の發展がより、一層急速におこなわれることになるので、生活の困難を感ずることが、より、一層大になるのである。

ブレンターノが婚姻の減少および一夫婦あたりの出生數の減退の原因としてあげている諸事實、オルデンベルグのあげている諸原因は、すべて實質所得と生活水準とが高かまつたということの結果ではない。それよりはむしろ、『身分』の思想と『身分相應の生活』の觀念とが、失なわれたために、生活欲望が、經濟學者の想定しているように、はじめ限りなく發展することになつた結果である。そして現代的な社會および經濟の發展の後期の段階による諸國において、出生率が低下しているのは、このように生活欲望が、そこではその上昇する生活水準を超えて高かまるからであるといわなくてはならない。